
共同研究の経過と概要

基盤研究「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」

村木二郎

本研究報告書は、2015年度から2017年度にかけて実施された国立歴史民俗博物館共同研究「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」の成果をまとめたものである。

1. 目的と方法

14～16世紀の東アジア海域では、世界史の中の大航海時代を前に、すでに活発な交易がおこなわれていた。その立役者は琉球王国である。大明帝国は海禁政策を建て前としたために自由な貿易ができず、冊封体制下にある琉球王国に貿易公社としての役割を担わせた〔岡本弘道『琉球王国海上交渉史研究』榕樹書林、2010年〕。これを逆手に、琉球は明と東南アジア諸国、朝鮮、そして日本をつなぐパイプ役として積極的な交易活動を展開し、「大交易時代」を現出したのである。

従来、琉球王国は明の冊封体制のなかで中継貿易国家として存立したが、ヨーロッパ勢力のアジア進出によって存在感が弱まり、日本に統一政権が成立すると、その尖兵である薩摩の侵攻を受けて支配下に入った、という受動的なトーンで語られがちであった。

しかし、昨今の研究では、この時代を作った琉球王国は、諸外国との複雑かつ柔軟な外交交渉を通して巧みな交易活動を積極的に展開したことがわかっている。東南アジア諸国とは対等な関係を作り上げ、南九州の諸勢力に対しては時には弱味に付け込んで優位な関係を築きもしている〔村井章介「古琉球をめぐる冊封関係と海域交流」『琉球からみた世界史』山川出版社、2011年〕。

そして何より、琉球とは異なった文化をもつ奄美諸島や、宮古、八重山といった先島諸島に侵攻し、中央集権的な体制で支配したのである。のちに奄美は薩摩に割譲されて現在は鹿児島県に含まれるが、先島諸島は近世期も琉球王府の支配下にあり続けて現在の沖縄県域に至っている。そのためか、先島に関しては所与のものとして琉球領土と認識されており、1500年に八重山で起こったオヤケアカハチによる蜂起も“反乱”、“鎮圧”と表現される。しかし、戦後に米軍が日本を支配した際、琉球とは別に、奄美、宮古、八重山を個別に群島支配したように、これらの地域は琉球とは異なる文化圏であり、強権をもった時代の琉球帝国によって版図とされたのである。

この研究では、大交易時代に繁栄した琉球を中心に据え、新たにその帝國的側面に注目しながら、中世後半の東アジア海域における多様な動態を捉え直すことを目的とする。その際、これまで独擅場であった文献史学による研究に目を配りながらも、集落構造や流通、技術に着目し、考古学、民俗学、分析化学等のさまざまな手法により、世界史の中に位置づけた新たな歴史像を探りたい。

文献史料に残らないためこれまでほとんど注目されてこなかったが、宮古、八重山といった先島

諸島には多くの中世村落遺跡が存在する。これには、廃村として地上に痕跡を残した集落遺跡と、地上に残らなかった集落遺跡の2タイプがある。前者は、海岸に面した隆起珊瑚礁の崖上に立地し、2～3メートルの高い石垣を巡らして防御し、さらに内部にも石垣で区画された多数の不整形な屋敷群が集合している。後者は、現在の集落が重なって新しく作られた聖地である御嶽があるが、陶磁器や土器が分布しており、そこには15世紀以前の村落が存在したことがわかる。かつて先祖の村があったという土地の記憶が、のちに新しい村ができた時にその地を祀る形で御嶽を作らせたのである。考古学と民俗学的手法から、「土地の記憶」の原点が中世の村にあることが明らかである。

大交易時代における中国の陶磁器や銭の流通は、琉球王府の動きに連動して、先島や奄美にもその影を落としておりと考えられる。文献史料からは伺えない東アジア海域における交易の動態を、奄美や先島の集落遺跡から出土する陶磁器組成を詳細に検討することによって導くことができる。

そこで、先島・奄美の集落遺跡と出土遺物を悉皆的に調査して基礎データを作り、さまざまな資料と照合・分析することによって、周辺地域から琉球王国さらには当該期の東アジア海域の様相を浮き上がらせる。そのため、下記のような計画で調査・研究を実施する。

1年目：先島の集落遺跡の踏査、ならびに出土遺物の情報収集

集落班は遺跡の踏査、陶磁器班は未報告資料の整理
奄美の情報収集

研究会の実施（於、国立歴史民俗博物館、宮古島）

2年目：奄美の集落遺跡、ならびに出土遺物の情報収集

集落班は遺跡の踏査、陶磁器班は未報告資料の整理
研究会の実施（於、国立歴史民俗博物館、奄美大島）

3年目：収集情報の整理、補足調査、研究会の実施（於、国立歴史民俗博物館）

フォーラムの開催（場所は未定）

2. 研究組織

館外と館内を分け、それぞれ五十音順で示した（所属は最終年度、◎は研究代表者、○は研究副代表者）。

[共同研究員・館外]

池田 榮史	琉球大学法文学部・教授
池谷 初恵	伊豆の国市教育委員会・文化財調査員
岩元 康成	始良市教育委員会・主事
岡本 弘道	県立広島大学人間文化学部・准教授
小野 正敏	本館・名誉教授
久貝 弥嗣	宮古島市教育委員会・主事
佐々木健策	小田原城総合管理事務所・主査
鈴木 康之	県立広島大学人間文化学部・教授
中島 圭一	慶應義塾大学文学部・教授

[共同研究員・館内]

- 荒木 和憲 本館・研究部・准教授
齋藤 努 本館・研究部・教授
○田中 大喜 本館・研究部・准教授
松田 陸彦 本館・研究部・准教授
◎村木 二郎 本館・研究部・准教授

[研究協力者]

- 栗木 崇 熱海市教育委員会・学芸員
小出麻友美 早稲田大学エクステンションセンター・講師
佐伯 弘次 九州大学大学院・教授
関 周一 宮崎大学教育文化学部・准教授

3. 研究の経過

<2015年度>

第1回研究会（4月18・19日 国立歴史民俗博物館）

- 個別研究報告：佐伯弘次「十五世紀の日琉関係と博多商人」
村木二郎・松田陸彦「歴博における琉球・沖縄展示」
関周一「古琉球研究の現状と課題」

第2回研究会および現地調査（10月22～27日 沖縄県宮古島）

- 宮古島島内遺跡巡見・陶磁器調査
個別研究報告：久貝弥嗣「宮古島の中世史と考古学的研究成果」

第3回研究会（1月10・11日 国立歴史民俗博物館）

- 個別研究報告：荒木和憲「琉球と朝鮮の交流史に関する現状と課題」
岡本弘道「琉球王国の海上交流史をめぐる現状と課題」



写真 現地での研究会

<2016年度>

第1回研究会（4月16・17日 国立歴史民俗博物館）

- 個別研究報告：池田榮史「考古学における古琉球研究の現状と課題」
池谷初恵「先島における陶磁器研究，陶磁器調査の現状と意義」

第2回研究会および現地調査（10月21～23日 鹿児島県始良市・喜界島）

- 始良市内，喜界島島内遺跡巡見
研究会はシンポジウム形式で公開（会場：喜界町中央公民館）
-

シンポジウム「中世の喜界島を考える」

村木二郎「中世における琉球と喜界島」

田中大喜「喜界島と鎌倉武士」

早田晴樹（喜界町教育委員会）「喜界町手久津久の遺跡について」

討論

第3回研究会（12月17・18日 国立歴史民俗博物館）

個別研究報告：栗木崇「古琉球時代における石切技術研究の現状と課題について」

小出麻友美・池谷初恵・小野正敏・佐々木健策・村木二郎

「波照間島ミシユク村跡と先島の集落遺跡」

小野正敏「八重山のムラと御嶽・口承」

久貝弥嗣「宮古島市内出土の13世紀～15世紀にかけての中国産陶磁器

一褐釉陶器と浦口窯系白磁を中心として」

中島圭一「北方からみた琉球王国の形成」

佐伯弘次「博多商人道安と「琉球国図」」

関周一「『朝鮮王朝実録』にみえる奄美諸島と先島」

岩元康成「奄美の中世城郭の調査研究の現状」

齋藤努「喜界島出土青銅製品の鉛同位体比分析（途中経過）」



写真 シンポジウム 中世の喜界島を考える



写真 ミシユク村跡遺跡測量調査

〈2017年度〉

第1回研究会（4月22・23日 国立歴史民俗博物館）

個別研究報告：佐々木健策「宮古島における石積み技術について」

池谷初恵・岩元康成・小野正敏・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎

「陶磁器調査の成果」

池谷初恵「琉球列島，北と南の陶磁器様相」

池田榮史「琉球列島における古代末～中世の在地土器研究の現況」

鈴木康之「草戸千軒町遺跡出土のピロースクタイプ白磁碗について」

村木二郎「琉球帝国を語る要件」

松田睦彦「民俗学・人類学的記録に見る八重山のムラ

—波照間島ミシク村遺跡をめぐって—

田中大喜「薩摩千竈氏と南薩摩の領主間競合」

荒木和憲「尚泰久の王権と〈帝国〉」

岡本弘道「琉球王国の活動の拡大と「人の動き」」

第2回研究会および現地調査（12月15～18日 沖縄県那覇市・久米島）

久米島島内遺跡巡見

研究会はシンポジウム形式で公開（会場：沖縄県青年会館）

シンポジウム「琉球帝国という視点」

久貝弥嗣「13世紀後半から15世紀前半に

かけての宮古島の遺跡動向

—宮古諸島における中国産褐釉

陶器の出土状況—

池谷初恵「琉球列島，北と南の陶磁器様相

—八重山諸島を中心に—

岩元康成「琉球列島，北と南の陶磁器様相

—奄美大島・喜界島の中世遺跡・

城郭遺跡を中心に—

荒木和憲「古琉球の王権と論理」

村木二郎「琉球帝国とは一周辺からみた琉

球—

討論



写真 シンポジウム 琉球帝国という視点

4. 共同研究の成果

文献史学を中心に研究の進展が著しい古琉球史を総合的に取り扱うにあたり、まずは文献史学・考古学の研究史を把握して問題点を探ることを重視した。そのうえで、本共同研究で独自のオリジナルデータを蓄積することで、奄美・先島から琉球を見つめなおすことが有意義であることを認めた。

そのため、奄美や先島に頻繁に出向き、現地調査をする必要があった。そこで、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「琉球帝国と東アジア海域の動態研究—集落・流通・技術—」（JSBS26284091、研究代表者：村木二郎）と併行して調査・研究を実施することとした。

オリジナルデータは共同研究員による①中世集落遺跡の測量図作成、②同一基準による出土陶磁器全点カウント、によって積み上げることにした。①中世集落遺跡としては、比較的遺存状態が良好であった竹富町波照間島ミシク村跡遺跡を選んだ。平板測量により200分の1の図面を作成することとし、3年間かけて完成させた。②陶磁器調査は、奄美地域では喜界町城久遺跡群大ウフ遺跡、同手久津久遺跡群中増遺跡、先島地域では宮古島市住屋遺跡、同ミズマ遺跡、石垣市フルスト原遺跡（1・2・3・4・5・10・15号石罫）、竹富町新里村遺跡出土資料を対象としたほか、沖縄県

立博物館・美術館所蔵ジョージ・H・カー氏採集資料，沖縄県教育委員会「ぐすく分布調査」採集資料についても重要参考資料として実施した。

さらに研究会を進めていくなかで，琉球における石積技術に関する報告を踏まえて，宮古島における中世段階と考えられている巨石墓（ミャーカ）を調査する必要性が生じた。そのため，2017年度には残存状況が良好な，久松ミャーカ群の2基の墓およびスサビミャーカの測量調査をおこない，基礎資料の充実を図った。

研究会では，これらのデータをもとに先島の集落の特徴，琉球周辺域の陶磁器様相を検討し，具体的資料に根差した新たな琉球史像を提示した。それらは，喜界町での「シンポジウム 中世の喜界島を考える」（2016年度），那覇市での「シンポジウム 琉球帝国という視点」（2017年度）を通じて，研究会外部の研究者にも情報発信し，共に議論することができた。個別研究としては，研究会メンバー全員および研究協力者から合計35本の研究報告があった。

これらの研究成果を，調査編・論文編に分けてまとめ，『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号・中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究，として刊行する。

（国立歴史民俗博物館研究部）



写真 ミャーカ測量調査